

目次

◇十五夜兎 作品集

卒業しました

.....

1

試行錯誤

.....

3

赤い実かじった

.....

5

気づいたときにはいつだって

.....

7

cowardly

.....

10

第一回化物会議

.....

14

◇ 烏^あ字^じ 作品集

みっちゃん

.....

18

あなごーぺあ

.....

20

あとがき

.....

29

◇十五夜兎 作品集

卒業しました

よく遊んだ人形。

毎晩一緒に寝るぬいぐるみ。

少女雑誌の付録のアクセサリ。

着れなくなったお気に入りの服。

全部、私の大切な思い出たち。

全部、幼い私の宝物。

全部、全部、段ボール箱に詰め込んで蓋をした。

「あら、随分部屋が広くなったんじゃないの」

母に言われて私は部屋を見渡した。

物がなくなった部屋は少し広くなり、どこもかしこもすっきりと片付いている。

ベッドを占領していたぬいぐるみの山も、本棚から溢れかえっていた雑誌も漫画も、細々とした小物たち

も、何もなくなつた私の部屋。

「綺麗になつたわねえ」

可愛いピンク色のカーペットは大人っぽい落ち着いた色に替えた。

三時になると音楽を鳴らす時計はデジタルの置き時計に。

壁に掛かっているのは着慣れた制服じゃなくてまだ糊がきいたスーツ。

「私、もうオトナだもん。整理整頓くらいできなきゃね」

今までのキャラクターものとは違う黒い手帳。手に馴染んでいないシンプルなボールペン。

「そうね。でも、」

髪型は後ろで一つ。可愛いものなんてもういらぬから。私はオトナだから。

機能性と合理性だけを求めて、オトナなんだからワガママ言わないで。

「なんだか寂しそうね」

それは、この部屋のことか。段ボール箱に詰めた何もかものことか。それとも。

「……仕方ないよ。……もう、大人だもん」

ハイヒールで擦りむいた踵が痛い。

目の奥が熱くなつたのは、そのせいだ。

試行錯誤

君のことを守りたくて僕は色々考えた

試行錯誤

君と僕はすれ違ってばかり

守るために遠ざけて
守るために傷つけて

思考錯誤

君と僕はすれ違ってばかり

僕は君を守りたかった
君は僕の傍にいたかった
それだけなのにさ

至幸錯誤

君と僕はすれ違っただけ
指向錯誤

一体どこで間違ったのか

志向錯誤

もう一度やり直せるのかな

試行して

思考して

何度も繰り返す試行錯誤

最後の最後に至幸になれたら……

そう思い

僕らは試行錯誤を繰り返す

赤い実かじった

あなたにならば、この命を奪われることだって本望なの。

「君を汚したくない」

もう手遅れよ。落とせないほどに私は染まってしまったわ。

「僕から離れて」

でもあなたが、私たちを惹きつけてやまないの。

ねえ、大丈夫。怖くないのよ？

それは眠るようなものなの。眠っている内に溺れて、二度と目が覚めないだけ。

ちよつとの苦みは蕩けるような甘さがごまかしてくれる。

さあ、選択の時よ。

「困った人だよ、本当に」

浮かべる苦笑に、私は笑顔を浮かべてみせるの。

「それだけ、あなたを愛しているのよ」

愛しい愛しい毒林檎。

あなたの毒が選ぶ先が、私の心臓であればいい。

赤い実かじった。

物語は、終幕へ向かっている。

気づいたときにはいつだって

気づいたときには助けを求められていた

世界が危険と助けてくださいと

おとぎ話のような素敵な世界

悪い王が壊そうとしている世界

酷い話があるものだ 僕が救ってあげなくちゃって

気づいたときには世界を終わらせようとしていた

仲間と一緒に王の手下を倒して、冒険の途中で耳にした噂話

王は勇者だったって

世界を救った少年だったって

力を手にした少年は力に溺れてしまった

酷い勇者があるものだ 僕倒してあげなくちゃって

気づいたときには偉くなっていた

倒した王の代わりになって素敵な世界が蘇る

仲間と一緒に素敵な世界を維持し続けよう

事件を解決させるために事件を起こそう

酷い王があるものだ 讃えられるために悪事を働かなくちゃつて

適度な刺激

重なる賞賛

ああもつと上へ

たとえば天気を操るだとか

たとえば人を思いのままに動かすだとか

神様みたいな存在に、僕はなってみたいと思うのだ

気づいたときには素敵な世界は荒れ果てていた

まるで僕が呼ばれてきたときのように

勇者様は王様へ王様は神様へ

世界を壊して作り直そう

だって僕は神様だ

酷い神があるものだ 失敗したら隠しちゃえつて

気づいたときには手遅れだった

酷い話があるものだ 僕が僕を倒すなんてそんな話

終わらないだなんてそんな話

cowardly

拝啓、花畑の君へ。

× × ×

恋を、しました。

甘くて、ふわふわして、温かいのにキュッと苦しい。そんな幸せな気持ちで満たされる。

これは恐らく恋とかいうやつで、相手は絶対あの子なわけ。

花畑に来る女の子。花と蝶に囲まれて、いつも穏やかに笑みを浮かべているあの子。

僕は仲間に笑われるくらい臆病で、自分でもわかっているくらい意気地なしで、女の子と会話なんてものができるはずもなくただ、隠れてあの子を眺めているだけの日々。

ある日手紙を書きました。

あの子に僕のことを知ってほしくて、あの子のことをもっと知りたくて、声をかける勇氣もなかった僕は手紙を書いて花畑に置いた。

僕が見てることも知らないんだろう彼女は手紙を読んで、次の日には返事を置いていってくれた。

可愛らしい封筒と便箋。手紙を読んでもらえたこと、返事をくれたことが嬉しくて、僕は何度も何度もその手紙を読み返した。

“ 拝啓、花畑の君へ。僕は君が好きなんです。”

思うだけで口元がニヤけるんだ。心臓が高鳴るんだ。

君は僕の生きる糧で、僕の希望になったんだ。

仲間は僕を笑った。あんまりにも、僕らしくない行動だったから。

臆病な僕は、今まで一度だってこんな大胆なことをしたことがなかったから。

意気地なしな僕は、一生こんな勇氣あることをしないと誰もが思っていたから。

悲しみを、知りました。

彼女が花畑に来なくなつて、僕は悲しみに暮れる日々を過ごした。毎日花畑に来る度に、彼女がいないことに落胆した。

彼女から貰った手紙を何度読み返しただろう。文面を覚えてしまつてからも、僕はずっと彼女の文字を目で追っていた。

手紙を書きました。

いないと知っているのに、来ないとわかっているのに、彼女のことを忘れないよう、思いの丈を綴り続けた。

“ 拝啓、花畑の君へ。僕は君が好きなんです。”

届くことはないと思っていてもそう書き続けることを止めない。僕はただ、ひとりきりで、震える声で呟くだけ。

君の笑顔が好きなんだ。温かく穏やかに微笑む笑顔が。

君の声が好きなんだ。小鳥と戯れる囀さえずるような声が。

君の髪が好きなんだ。ふわふわと風に揺れる甘い香りの髪が。

拝啓、花畑の君へ。僕は君のことが、

食べちゃうくらい、好きなんです。

仲間が笑った。僕が、あまりにも僕らしくないから。

狼の僕が人間の彼女に恋をするなんて、あまりにも馬鹿げていたから。

想いが本能を上回ることなんて、有り得ないとわかっていたから。

もう彼女は花畑に来ない。もう彼女に手紙は届かない。

僕が臆病なままだったら、僕が意気地なしのままだったら、彼女は笑っていられたのに。幸せに生き続けられたのに。

拝啓、花畑の君へ。

君に恋をしました。

でもそれは所詮、狼の身勝手な恋物語。

赤く汚れた君からの手紙を、読めない文字の書かれたそれを胸に抱きながら、僕は花畑で遠吠えをした。
長く、長く、届く相手もないのに。

“ 拝啓、花畑のあなたへ。わたしはあなたのことが好きなんです。
夢見る小娘の妄想と笑ってください。
それでも、わたしを想って手紙をくれるあなたのことが、
食べられてもいいくらい、好きなんです。”

× × ×

これは、名前も知らない二人の臆病者の物語。

第一回化物会議

「俺らの死因ってなんだと思う？」

大真面目な顔をした透明人間の問いに、化物一同はキョトンと顔を見合わせた。

「どうしたいいきなり……脳味噌透けて消えたか？」

「悪いもの拾い食いたんだろ！オレには駄目って言っといてー！」

「透明人間ってどうやって治療するんでしょう……頭を割って大丈夫なんでしょうか？」

吸血鬼、狼男、魔女と続けて言われ、透明人間は頭を押さえたため息を吐く。

「あーもー……お前らにきいた俺がきいた俺が馬鹿だった。でもお前らしかいないんだからしょうがないや」

「がしがしと包帯の上から頭を搔き、透明人間は口を開く。」

「いやさ、俺ら化物って人間とか他の動物と比べて寿命長いじゃん？」

「まあ、な」

でもさ、存在してる以上一応は生きてるわけじゃんか？で、生きてるならいつかは死ぬ。俺らの死ぬ原因は何なの？」

化物一同は再び顔を見合わせ、またも順に口を開いた。

「木の杭」

「銀の銃弾だなー」

「ひ、火炙りでしようか」

お前らの弱点はよくわかった」

透明人間は再びげんなりとした表情でため息を吐いた。

大選に難あるぞこれ。ってか俺がハブられてるみたいじゃねえかこれ」

ねー、透明人間は何がやりたかったのー？」

さっき言ったろーが。何これ、馬鹿ばっか」

俺様を馬鹿呼ばわりとはいいい度胸だ。その体透けさせて二度と見えねえようにしてやろうか？」

透明人間さん、狼男さんの頭を鷲掴まないでください！それと吸血鬼さんは落ち着いてください！」

三者殴り合うような乱闘が起こったが、ふと、狼男の尻尾を掴み透明人間の包帯を剥ぎ取りかけていた吸血鬼がその手を止めた。

「……ああ、なるほどな」

な、何がですか？」

千切れる！尻尾ちぎれるうううう！！」

維持できなくなる！消えるから包帯返せええ！」

「これか……」

あの、何かも気になるんですがその前にお二人を解放していただけると……！！」

魔女の説得が通じたのか振りかざした杖が効いたのか、解放された二人はバタバタと四つ足で吸血鬼から距離を取った。

力で狼男振り伏せるとかマジねーよお！」

おまつ、死因の話した直後に殺す気か！マジに消えて見えなくなるところだ！」

貴様ら、今死にそうか？」

「誰かさんのせいで……！」

お二人とも……」

あ？望み通りにしてやるうか？」

吸血鬼さんってばああ！」

再び拳を固めた吸血鬼から二人が全力で逃げたので乱闘は避けられる。舌打ちした吸血鬼に魔女が怖ず怖ずと問いかける。

で……さっきは何にお気づきに？」

ああ、死因とやらにな」

フツと口元に笑みを浮かべ、吸血鬼は二人が消えた先を優しく見つめた。

俺様はしばらくは死なんな」

「っ？な、何ですか？」

貴様らも、しばらくは死なせんさ」

え？吸血鬼さん、何ですか？ねえ、教えてくださいよー！」

自分の頭で考える」

吸血鬼は魔女には教えず、自分もふらりと闇の中に姿を消した。

笑み作られた自分の顔を、三人に見せないように。

永い時を生きる化け物の死因。

それはきつと、こうして馬鹿騒ぎをする仲間がいなくなったときに訪れるもの。

生きていることに飽くまでは、貴様らに付き合っただけさ」

青白い月明かりの下、吸血鬼の呟きに透明人間は照れくさそうに体を透かした。

「ごっちの台詞だ、ばーか」

◇ 烏^あ字^じ 作品集

み っ ち ゃ ん

たしかに 聞こえたんだ

君の声が

まぐれだとか 何とでも言ってくれればいい

けど 確かに 聞こえたんだ

かすかだったけど 何を言っているかもわかつたんだ

まぐれだとか 何とでも言ってくれればいい

確かに 確かに聞こえたんだ

君の発したその言葉が

大気をふるえて 確かに

自分のこまくに届いたんだ

間違えるはずがない

なつかしくて 安心するような

聞いているだけで楽しくなるような

そんな声

間違えるはずがない

間違えるはずがないんだ だって

君が写っている写真が言ったんだ

きれいな幸せそうな笑顔をした君が

君はもう手の届かない場所にいったけど

聞こえたんだ 声だけは はっきりと

線香が 煙をくゆらせ燃えていた

しみるような甘くてさわやかな匂いをつれて

君の写真を煙がくすぐる

あなざーへあ

僕が初めて君に会ったのは

君が今よりも少し小さくて

楽しみに家族をつれて話しているときだった

僕を初めて見たときの君の目は、とても楽しげで

僕の中の何かに期待を持っているようだった

嬉しかった そんな風に僕を見てくれるなんて

そして、そんな目で僕をみつめると同時に、

君は僕をつれて君の家族のところへ行った

その人たちは、僕を少し品定めするような目で見て

君と一緒にいてもいいことを許してくれた

その日から、僕たちはいつも一緒だった

ちよっと草が多く生えている公園に行くときも

その公園にある遊具のほとんどは古くて、

ところどころがさびだらけだった

けど、そんなことにはおかまいなしで、
いろんなところにさびをつけながら、

僕たちは必死に遊んだ

ときどき雑草がくすぐったかったのを覚えている

すぐそここの川原に行くときも 一緒だった

濡れることも気にせずに

びしょびしょになりながら遊んだ

やっぱり今の時期にはいる水はまだ冷たくて、

始めはびっくりしたのを覚えている

帰りの道も一緒だった

その日の夕焼けはともきれいだっ

夕日が丸ごと町を照らして、家や車、そして人を

古ぼけた葉缶のような色に染め上げていた

まるで絵の中にいるようで、僕たちは

とても感動したのを覚えている

そのときは、僕も君も町と同じ色に染まっていて、

まるで絵の中の一部になれたような気分だった

君は虫をつかまえるのが好きだった

虫がいそうな草むらを見つけては、

シジミチ ヨウやモンシロチヨウ、

シヨウリヨウバツタやトノサマバツタ、

テントウムシやユガネムシ、そしてカマキリ・・・

たくさんの虫を見つけてはそれを素手でとって、

腕にのっけたり服につけたりして遊んでいた

うっかり傘を忘れてびしょびしょに濡れたときも、

そのあとはいいでだからと君と一緒にお風呂に入った

君は僕の背中を流してくれて、

とても気持ちよかったのを覚えている

僕たちは、たくさんたくさんたくさん遊んで

たくさんたくさんたくさん走って

たくさんたくさんたくさん転んで

たくさんたくさん思い出をつくった

けれど、ある日から

君はあまり僕をつれて遊んでくれなくなっていた

僕といることが、だんだんきゆうくつになり始めたらしい

僕も君と一緒にいると、だんだん張り詰めるようになってきた

もっと一緒にいて遊びたいことには、お互いに変わらないんだろうけど、

一緒にいることができなくなっていったつらい　とてもつらいことで、僕も君も苦しかった

気づけば、君はかわりの子をつれて、

一緒に遊ぶようになっていた

.....どうしようもなく、さびしかった

君といられないことが、どうしても、つらくて、苦しくて、やるせなくて

ある日、とても久々に、君が僕をつれにいつてくれた
そして、僕のかわりにつれてる子も一緒にだった

今日は君といて、張り詰めるようなこともなく、
とても心地がよかった

君が僕をつかんで、すがすがしい朝の坂道を下っていく
朝特有の気持ちのいい乾いた風が、
僕と僕をつかんでいる君の手をなせていった
君といるようになった子も楽しそうだった
そのなんともくすぐったい空間のためか、
かすめる風を甘く感じる

ふと、君が止まった

そこには、三方を低めの壁で囲まれた、小さな空間が
ポツリとあった

君は、おもむろにそこにかがみこみ、
つかんでいた手を僕から離していく
手のひらから指先へと
その動作が、やけにゆっくりと感じられた

え
？

一瞬、何が起こっているのか分からなかった
いや、分かっていたうえで、受け入れたくなかっただけ
だった

けれど、その気持ちを押し殺す

君にはもうかわりにあの子がいる

きつと、僕の前にも、君と一緒にいた子がいたんだろう
僕が偶然見ることが無かっただけで

そして、前は、僕がその子のかわりだったんだろう
そう考えながら、自分の状況を少しづつ妥協していく
静かにコンクリートにおろされる感触に身を置いた

君は僕に背を向けると、振り返ることなくあの子と
一緒に歩いていった……………

(……………ありがとう。僕を選んでくれて。)

姿が見えなくなるまで、その感情を抱きながら、
大きくなつた後姿を見送る

その後の、ただ流れるだけの静寂

．．．．．しばらく、長いとも短いともつかない
時間が続いた

目の前を、人が、犬が、猫が、自転車、車が、
通りすぎていく

静かでさわがしい時間がすぎていく

．．．ブ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ

ブ
オ
オ
オ

．．．キ
ュ
ッ

普通の車よりも大きな車が、僕の前で止まる
いや、その四角い空間の前に止まったという方が
いいだろうか

車から人が降りる

その人が、僕を持ち上げる

重力に逆らうようなつっぱった感覚

フワッと浮き上がる浮遊感

―刹那―

指が離され、影がせまる

(・・・さっきの指とが重なるなあ)

ドサツバサツ

おちたことが分かる軽い衝撃

周りには、一面のゴミ

上から、飲み込もうとせまる厚い金属の板

(・・・ああ、あああ、あああ・・・――)

いつ見ていたのだろうか、気づけば、

走馬灯のように君との思い出が流れていた

息苦しいほどのゴミの中でモミクチャにされている

ゴミの中で、かき回され、押しつぶされ、

今ではもう君の足を護るためにかたどられた形も

原型をとどめていなかった

君への思いが溢れる

（・・・大切な時間を分けてくれて

楽しい時間を分けてくれて

ありがとう・・・

・・・君とすごせた日々が

あちこちかけまわったあの日々が

楽しかった・・・

・・・ありがとう、僕を選んでくれて・・・

意識は、ゴミと共にみくちやにされて、
静かにもまれるようにして薄れていった

（・・・かいくん・・・）

そんな中、最後に浮かび上がったのは君の名前だった
ああ、僕はそんなに君のことが好きだったんだ

ゴミ収集車は、さらに次の目的地へと
坂を登っていった

あとがき

◇十五夜兎

卒業しました

テーマに沿って書いてみよう。今回は「卒業」でした。

私の卒業式の思い出といえば、中学二年で眠気と戦い、三年の最終決戦で負けたことくらいですかね。出席番号早かったんでステージの目の前で、欠伸の数だけ涙を零しました。特別慕っていた先輩もいなければ（廃部寸前の同年のみで成り立っている部でした）、卒業？やった自由だ！」みたいな卒業に対する寂しさもなかったので。うん、嫌な卒業生ですなぁ。

というわけで卒業式にまともな思い出がなかったので今回書きました「卒業しました」は、子どもからの卒業」となっています。ちなみに私はまだしていません。しばらくする予定もありません。

いくら歳を重ねても、心だけはいつまでも幼い子どもそのままという子に迷惑をかけるような駄目な大人になりたいです。良い子の皆さんは真似しないでください。

赤い実かじった

童話シリーズ、『白雪姫』でした。

危険な香りに魅入られてしまった白雪姫と、彼女の生を望む毒林檎。

林檎を手に入れてしまえば死んでしまうのに、愛しているが故に手に入れずにはいられない白雪姫。白雪姫を

殺してしまえば手に入れられるのに、愛しているが故に身を引こうとする毒林檎。

一見バッドエンドを迎えそうなストーリー。でも、白雪姫と毒林檎が結ばれたら、それはそれで幸せでしょうか？ この後白雪姫は王子によって息を吹き返すのか、このまま毒林檎と共に終幕を迎えるのか。それは、この場では語られることのないお話です。

cowardly

原点回帰。ということ、異種族の報われない恋でした。これこそ無限ループしてそうですね。

人間以外を書くのはとても好きです。そこに人間を入れるのも好きです。だから私が書くものはこうなるのです。反省はしてるが後悔はしていません。公開はした。

ここに至るまで何作書いたのかは思い出せませんが、一年の頃は一つの冊子に二作品くらいのペースだったと思います。……はて？

書きたい放題な作品たちを今まで読んでいただきありがとうございます。これからも懲りずに書き続けていこうと思います。

第一回化物会議

ふざけたタイトル、ギャグ的内容、隠し味にほんのりシリアス、そして登場人物皆人外。これ大事。テストに
です。

ハロウィンな雰囲気は好物ですので、季節を問わずに書きまくります。今回のキャラたちは一応名前があったのですが、ややこしくなるので種族名にしました。寂しがり屋な俺様吸血鬼、ツツコミ属性の苦労性透明人間、力自慢なアホの子狼男、引っ込み思案の世話焼き魔女。

◇烏字

今回も、駄文を書き散らすことになってしまいました。

そして暗い内容にもなってしまい、たまには明るいのも書きたいなあと思ったり思わなかったり。

あなざーぺあ」を読んでくださった方は、あの詩の主人公の正体がわかったでしょうか？

自分にとつてのあたり前であり、身近であるもの。相棒であり、守ってくれるもの。

けれどしよせんは物であり、使い古せば形見でもない限りいつか捨ててしまうもの。

そんなところに視点をおいて書いてみました。

みなさんには、そういった物がいくつありますか？

尻切れトンボになりますが、ここらで失礼します。

◇著作者

山陽女学園高等部 三年生 十五夜 兎
同 二年生 烏字^{あじ} 部長

◇表紙絵

山陽女学園高等部 二年生 烏字^{あじ} 部長

山陽女学園文芸同好会誌 通算二十三号

櫻

二〇一五春号

平成二十七年四月七日 発行

著作者・発行者

山陽女学園高等部
文芸同好会